

### 第3回 文化交流施設整備検討会【要旨】

日時	令和3年10月28日（木）午後6時～午後8時
場所	オンライン開催
出席者	（委員）卯月盛夫委員長、齋藤啓子副委員長、沢木拓也委員 羽生冬佳委員、両角達平委員、町田高委員 鎌田理光委員、松田智子委員、小林行男委員 清水啓史委員、志村博委員、富永新三郎委員 北川嘉昭委員、古瀬清美委員 （事務局）伊藤地域文化スポーツ部参事、文化交流推進課担当 松崎再開発担当部長、能見再開発担当課長 住まい街づくり課担当

#### 1 開会挨拶、委員出席確認

#### 2 議題

##### （1）前回の振り返り

##### ①再開発における西日暮里駅周辺及び施設

○（事務局） 第2回文化交流施設検討会後にいただいた質問の内容も含め、再開発のアクセス動線などについて、説明する。

画面共有している資料（第2回文化交流施設整備検討会配布資料2-3）の施設周辺の黄色い部分は、歩行者空間である。

JRの西日暮里駅からペDESTリアンデッキを使い、施設にアクセスするには、JRの改札を出て右側の「ルートにっぽり」辺りに設置を想定しているエスカレーターを利用する。エレベーターと階段は、エスカレーターの反対側への設置を想定している。

ペDESTリアンデッキに上ると道灌山通りを上空から渡ることができ、道なりに歩くと施設の2階部分の入り口に至る。日暮里舎人ライナーの改札へもペDESTリアンデッキから直接行くことができる。

ペDESTリアンデッキ上から交通広場へ下りるためのエスカレーターや階段、エレベーターも設置する想定である。

ペDESTリアンデッキを利用し、商業棟北側にできる住宅棟や、その先の市街地へ通り抜けられるよう計画している。

次にJR沿いの道路部分であるが、グラウンドレベル（1階）の北西の角の部分は、公共駐輪場の設置を想定している。

また、歩道が整備されていない道路もあるが、再開発後、両側歩道道路を整備する計画である。現在、JRの高架に沿って整備している自転車置き場は、利用停止する考えであるが、その後の活用方法については、JRの敷地のため歩道整備とあわせて活用できるようJRと協議中である。

続いて資料1は、西日暮里駅側からみた商業棟の平面図であり、交通広場とこの広場の北側に商業棟、住宅棟を配置する計画となっている。

JRや千代田線の駅からグラウンドレベル（1階）で施設へアクセスする方法は、道灌山通りの横断歩道を渡り、交通広場の脇を通る形となる。

JR西日暮里駅の西側からアクセスする方法は、JRの高架下を抜け交通広場の脇を通る形で考えている。

駅側から商業棟に入ると右側にエレベーター、正面にエスカレーターがある。施設奥に

ある アトリウム部分にもエスカレーターがあり、いずれかにより7階の文化交流施設へアクセスできるように考えている。

施設中央にあるエスカレーターは6階までのため、7階以上へアクセスする場合には、北側のエスカレーターかエレベーター、又は南側のエレベーターに乗り換えが必要となる。

ペDESTリアンデッキを使い2階部分から7階へアクセスする方法は、施設正面と北側のアトリウム、東側の日暮里・舎人ライナー側からの出入り口があり、施設内では1階と同様の位置にあるエスカレーターとエレベーターを利用していただく。

- (委員) 文化交流施設へは1階の駅前広場か2階のペDESTリアンデッキから来ることになると思うので、この動線を分かりやすくすることが大切であり、大型のエレベーターの導入も検討してほしい。

昨年、日本橋のコンベンションホールを視察した際に、5階と6階にホールが設置されていたので、エスカレーターのほかに50人程度が乗れる大型エレベーターがあった。大型エレベーターがあれば一度に多くの人を運べるうえ、7階の文化交流施設のみでなく、8階・9階のコンベンション施設でも活用ができる。

行きはエレベーターで一気に上がり、帰りはエスカレーターで各階を回遊しながら下りれば、上層階からのシャワー効果も期待できる。さらに、1階からエスカレーターで上がる人向けにエスカレーターの随所に7階の紹介を掲示し、行ってみたいと思わせる工夫も必要である。

さらに、エスカレーターから外の景色が楽しめる工夫もするなど、7階の眺望も含め、この施設ならではのアイデアで回遊性を高めてほしい。

- (委員長) とても重要な視点である。大型エレベーター導入はいかがか。
- (事務局) 大型エレベーターは主に搬入用での導入を検討しているため、原則、来客者は乗れない想定である。
- (委員長) 7階から9階に行くためのメインのエレベーターは、どれになるのか。
- (事務局) 正面入り口右側のエレベーターかアトリウム側エレベーターを想定している。
- (委員) 今回の意見を受け、大型エレベーターでアクセス動線を作ることは良いアイデアである。その方向で検討させてほしい。
- (委員長) この意見は重要だと思うので、ぜひ検討してほしい。
- (委員) この施設は、駅を利用する人以外もいるのではないか。地下に駐車場を設置する考えはあるのか。駐車場があるならば、駐車台数は何台を想定しているのか。
- (事務局) 地下1階と地下2階に駐車場を整備する予定である。条例で決められた駐車台数があり、地下1階は自走式、地下2階は自走式と機械式で計画している。
- (委員長) 住宅棟の駐車場は別に設けてあるのか。
- (事務局) 機械式の駐車場を住宅棟に設ける計画である。
- (委員) 中央のエスカレーターで7階に行く場合、6階で端のエスカレーターに乗り換える動線となるが、駅前の商業施設の高層階というのは、テナント内部があまり見えないように壁が必要な歯医者や美容院が入るイメージがあり、端のエスカレーターが見えず、6階で人の流れが止まってしまうのではないかと考える。7階以上への導線はどのように考えているのか。
- (事務局) 6階のテナントは決まっていないが、自然な人の流れとなるよう、準備組合と検討をしていきたい。
- (委員) 西日暮里駅周辺は、日用品を買うスーパーが少ないため、低層階にスーパーが入ると想像しているが高級スーパーも個人的に要望したい。

また、スーパーを入れる際、1階にするか2階にするかも重要である。最初に施設へ入っ

たときに何があるかにより、建物の印象が変わってくるので、考える必要があるだろう。

ペデストリアンデッキと繋がっている日暮里・舎人ライナーの駅と、グラウンドレベル（1階）にあるJR及び千代田線の駅について、人の流れをどのように想定しているのか。

- （事務局） 店舗の構成等については、今後準備組合と検討していくが、日用品の買い物が不便という意見は地権者から出ており、そのようなお店がどこかに入る可能性があるかと想定している。

この商業施設の顔となる1階と2階にどのようなものがあると足を運びたくなるのかは重要と考えている。今後、準備組合で商業施設勉強会を立ち上げて検討するので、意見として伝えたい。

- （委員） 最近、屋内空間でも屋外を感じられる商業施設が増えている。例えばデンマークでは建物内にも関わらず屋外でスキーをしているように感じるものもあり、建物に斬新なことを少しでも取り入れると、施設全体が魅力的に感じられる。
- （委員） 多くの人々が利用する施設は、どんなトイレにするかが重要である。特に商業施設では、上層階になるにつれ利用形態が変わっていくため、フロアごとにトイレの特徴を変えても良いと思う。
- （事務局） トイレの位置も含めそこまでの検討に至っていないが、一般的な商業施設では、階段付近に設置することが多い。最近では、男子、女子トイレとともに誰でも入りやすいトイレの設置が求められており、今後の検討の中で特徴のあるトイレについても要請していきたい。
- （委員） 多くの人々が利用する場所でのトイレは意外と重要であり、「あのトイレは居心地が良い」とか「設備が優れているから」とわざわざそのトイレに行く人もいる。今回の施設も特徴の一つとしてそのようなトイレを作るのも良いと考える。

- （委員長） 再開発の設計に携わっていると、トイレのスペースがないことがあとで発覚するケースがある。今回の再開発では、全フロアのトイレについて注意していただきたい。

仙台の駅ビルのトイレはとても評判がよく、家族が待つスペースや緑がある。トイレに寄った帰りに買い物をする人もいるだろうし、重要な視点と思う。

- （委員） トイレをジェンダーフリーにする点の検討は必要と考える。スウェーデンではほとんどの公共施設のトイレで、性別を分けず手洗いスペースと化粧ブース、洋式のトイレが設置されており、今後、配慮されるとよいと思う。
- （委員） 池袋の再開発で誕生したハレザ内の区民センターでは、大変豪華なトイレが出来ているが、トイレに至るまでの通路は殺風景でいかにも公共施設と感じた。コスプレイヤーたちが着替えることを想定し、広々としたトイレを作っている事例もある。

7階の平面図に「屋根」とあるが、この部分は屋外利用ができるのか。また、施設外観図で、壁面の一部の凹ませた部分に緑が描かれているが、屋外として使えるスペースか。

豊島区役所では、屋上庭園から外階段で4階フロアあたりまで降りられたり、渋谷の商業施設も同じようなつくりになっているところがある。建物外観の植栽部分を上手に使い、高い建物でも屋外スペースを楽しめるように工夫されているが、この施設でもそのようなことを考えているのか。

- （事務局） 屋外部分の活用については、あくまでも外観の見た目としての壁面活用を検討しており、現在は、常時人が出られるようなスペースとして検討されていないが、今後の検討によりそのスペースを常時使えるようにすることもあるかと考える。なお、7階の屋根部分は、機械設備等を置くスペースを想定していると聞いている。
- （委員長） 施設の外観を見た際に7・8・9・屋上に魅力的な何かがありそうだ、行ってみたいと思わせるデザインが必要と考える。エスカレーターやエレベーターの動線についても

1階から直通でつなげるのか、それとも7階以上を別のものをつなげるのか。

施設の縦の動線と周りの景観を一緒に考えてほしい。10階建てだが、すごく高いビルではないため、屋上を使うことも検討してほしい。

再開発に関する意見は、この検討会だけに留めず、再開発側に提案したいが、いかがか。

○(委員) 今日頂いた意見はいずれももっともである。

まず、エレベーターだが、上層階のコンベンション施設でも多くの人動くことを考えると全員がエスカレーターで下りることはかなり難しいと考えられる。大型エレベーターは搬入専用にするべきではないだろう。

また、エスカレーターについても、どのように人を誘導するか具体的意見を述べていきたいと思う。高齢者への配慮やベビーカーが乗れるようにするなど、駐車場から施設内の動線は大事な視点である。

さらに、日本のトイレは世界に誇るべき文化と思っている。ジェンダーフリーなど、時代のニーズに沿いつつトイレまでの動線も内装同様に考え、少し先の検討となるが素敵なトイレにしたい。

7階以上の屋外の活用についても、検討会での意見を準備組合等に提出していきたい。

#### (1) ②事例報告(キーワード)

○(事務局) 前回の事例報告の振り返りのため、いただいた意見をもとに施設のコンセプトを考える資料をまとめた。今後の事例報告についてもキーワードをまとめ、第5回目の検討会の際には、文化交流施設を整備する機能の素案を作りたいと考えているので、まずこの資料をもとに意見を頂ければと考えている。

○(委員長) 日常・非日常、目的・無目的という前回の事例報告でのキーワードと考えられるワードが、この4象限マトリックスに整理されている。これを基に、今後具体的なスペースや機能について検討していきたい。

○(委員) この広い施設をどのように活用するのだが、ある程度目的を持ったものを作ったらどうか。例えばクラブチームを作りボッチャ大会を開いたり、地域の大人が子どもにメンコやベーゴマを教えるなどどうかだろうか。

また、美術や音楽、スポーツなどの少しレベルの高い教育の場を提供することもよいと思う。

○(委員長) 4象限マトリックスが重なっているところについても意見を加えながら、具体的に考えていければと思う。この象限には、時間軸という考えもあるだろう。施設機能を固定してスペース作ることも良いと思うが、柔軟に時間帯ごとに使うことも検討してみるのかいか。このことは、7階のみでなく8階・9階でも可能性があるかもしれない。

○(委員) 施設動線の話があったが、車椅子登山をやっていると移動が非常に大変であり、この施設にも大型エレベーターがあれば、容易に上層階へ移動させることができる。

○(委員長) 公共施設に求められる機能は、以前より増しており、公平で平等な施設にしていきたい。

○(委員) 4象限マトリックスの吹き出しで日常と非日常の境が不明瞭と思い、後々議論することかと思うが、観光分野は非日常の目的の象限と考える。非日常で無目的とはどのようなケースが当てはまるかと考えた場合、空間の特殊性ではないだろうか。

例えばポーッとしに行くときに、日常的なスペースが欲しいと思うのが、非日常性を求めて行くときは、駅前の7階にある空間の優位性を考えたほうがよいだろう。人によっては鉄道を見下ろせることが楽しかったり、この立地ならではの周りの景色も活かした非日常性が演出できると、空間の特殊性が出てくるのではないかと考えた。

前半の議論にもあったが、ビルの詳細な設計を議論することにより、7階以上の空間で特別な非日常の演出ができると、無目的に来てくれるようになるのではないか。

- (委員長) やはり7・8・9、あるいは屋上からの眺望は重要なのではないか。

茅ヶ崎の再開発関連の仕事をしているが、富士山が見えることを開発の売りにしようとしている。

渋谷の宮下公園の屋上でも若者がパソコンやお茶を飲みながら、自動車交通量や山手線を見てホッとしている。それらが彼らにとって非日常なのかもしれない、普段と違う荒川区での眺望も魅力があるかもしれない。

- (委員) ヨーロッパでのまちづくりのオリエンテーションは、最初に高いところに上り、自分の住んでいる街を一望し全体像を把握することから始まる。

この施設においても、施設の西側は開けていると思うので、鉄道や西日暮里らしい景観が見えるのではないか。そのような眺望が、我がまちのアイデンティティを視覚的に与えてくれるものだと考える。

- (委員長) 江戸のまちは、富士山と筑波山の眺望をベースに道路計画ができていますので、この施設から筑波山が見えるならば観光分野も含めて施設の魅力となるだろう。

## (2) 事例報告「齋藤委員」

- 文化交流施設整備の検討に子どもの参加が、どのような可能性を与えるのかについてのアイデアの参考になればと思う。

私は、学生時代から「冒険遊び場」づくりに関わっており、冒険遊び場は、4象限マトリックスで考えると非日常部分に該当し、子どもたちが廃材で小屋をつくったり遊具を手づくりしたりし、思い思いに自分たちで遊ぶことをつくっている場所である。

遊び場には、学生たちもおり、子どもは学生がやっていることを見様見真似でいろいろな遊びが展開されており、遊びの中で子どもたちが無目的の中から目的を見つけ出し、発展させている。

さて、世田谷区では、1980年代後半から住民参加による本格的なまちづくりが始まり、私が世田谷トラストまちづくりで携わったものを事例報告する。

まず、中学校沿いの都市計画道路の整備だが、中学校の一部を開放することにより歩道を一体的に整備しスロープをつくり、誰でも使える斜路として設計するため実物大の模型を使い社会実験も実施した。

また、中学生にもまちづくりに参加をしてもらうため、ものづくりをまちづくりの参加と捉え、学校周辺の草花を活用して、地域住民と中学生で草花タイルを作った。

さらに、公共施設の改編の際に、デザインゲーム参加手法を活用し、住民ごとにグループに分かれ施設内の配置などについて施設プランのシミュレーションを互いに発表、参加型の検討を行ったり、世田谷区役所と武蔵野美術大学が連携し、街での10年ごとの出来事を可視化することにより、商店街の変遷を知る絵本づくりをきっかけに、商店街の未来を考えるプロジェクトを行った。

世田谷トラストまちづくりでは、発言する機会の少ない若者世代を街づくりに参加させるために、若者世代の声を冊子にするTeens編集部プロジェクトを5年間実施した。公共施設づくりの話合いでは、若者のたまり場になるような場所は作らないでほしい、若者はマナーが悪いから使わないでほしいという意見が良く出るが、その話し合いの場に当事者が参加していることはほとんどないため、プロジェクトとして実施したものである。この活動は、情報誌づくりを発端に、地域に関わっていきこうという試みであり、公募で集まった中高生がテーマを話し合い、それを取材し記事を書き、印刷物にするための版下づくりまでを自分た

ちで行う形である。

大人がしたサポートは、編集会議を開くための全般的なサポートや会場確保、参加者募集のチラシを多くの場所に掲載したこと、また、子どもたちの参加を促すための5年間の達成目標のプログラムをどうするのかということを検討した。

最終的には、地域の大人たちから若者と話せてよかったという意見が多数出るとともに、子どもの社会参加に繋がる施策となったうえ、子どもたちも自分自身は何ができるかわからなかったが、雑誌づくりを通じてやりたいことなどの企画が湧いてきたようであった。

実際に企画を考えると、例えば、模造紙に企画のテーマやタイトル、取材内容などを書き込んだポスターをグループごとに掲示し、それぞれ発表をおこない、お互いに評価しあった。

また、居場所をテーマとした話し合いの際の手法のひとつとして、参加者が「あったらいいな、できたらいいな」と思う行為・場所・人・もの・使われ方ごとにカードに書き、全員が書いたカードの中から自分が思う「あったらいいな、こんな場所」のイメージになるようカードを選び、理想の居場所について発表しあった。

カードの例として、「こんなふうに使えたらいいな」、「こんな所にあったらいいな」、「こんなものが使えたらいいな」、「こんなことができたらいいな」、「こんな人と一緒にいいな」の5種類であり、参加した中高生の人数分「あったらいいな、こんな場所」が発表された。

いろいろな手法を活用して完成した1年目の冊子『世田谷のぶつぎり』であるが、参加した中高生が企画を続けたいとなったため、コンテンツが非常に充実した『世田谷のぶつぎり弐』が翌年完成した。3年目はニュースレター形式となり、自分たちが欲しい居場所を特集したため、世田谷区長と座談会をする企画が実現した。初期から参加している中学生が高校生に、高校生が大学生になり、初期はデザイナー等が手伝っていたが、最後の5年目は完全に自分たちで作り上げた。

まとめとなるが、社会学者であるシェリー・アーンスタイン氏が考えた『住民参加のはしご』をもとに、発達心理学や環境心理学の専門家であり、子どもの参画について第一人者であるロジャー・ハート氏の『参画のはしご』という理論がある。

このはしごは、8段目が一番高い参画レベルであり、1～3段目は参加という形態は取っているが参画ではないため、非参画の段階となっている。大人が主催する行事で子どもが形だけ参加していることは、意外とないわけではない。

4段目以降が参画の段階となり、4段目は仕事を割り当てられてはいるが、情報は与えられていない状態であり、大人が用意したことをやらせている段階である。5段目は、子どもが大人から意見を求められており、考えていることを聞いている、さらに6段目は、その意見は良いので大人が仕掛けて子どもと一緒に決定をする。7段目は、子どもが主体的に取り掛かり指揮するため、子どもに決定権がある。最終的な8段目は、子どもが主体的に取りかかり、大人と一緒に決定をする、子どもと大人が平等な関係で、お互いに信頼し合っているという状況となっている。

なぜまちづくりに子どもや若者が参画するのか。何かを作ることを通し、様々な人と子どもが関係を築くことができること、子どもに起きている問題を子ども自身が解決することができることであったが、特にこの冊子づくりから私たちが気づいたことは、子どもの参加や参画が生まれるのは、大人の参加や参画があるところであり、これがないと子どもの参加や参画は生まれないし、生まれてくる可能性が非常に少ないということであった。

そして、子ども自身にとっては、単に子どもの参加であるが、私たち大人にとっては、子どもは現在と未来のまちづくりをつなげていく存在ではないかということや、まちづくりの主体形成を広げるのは、子どもや若者たちではないかということであった。

現在、私たちが検討しているパブリックスペースでサードプレイスとなる文化交流施設は、多世代が豊かな利用を促進することで、子どもや若者の参加があるところになるのではないかと考えている。

#### 【質疑応答、意見】

- （委員） 現在、世田谷区では、どのようなことで子どもたちの参画が生まれているのか。
- （委員） 世田谷にはプレーパーク世田谷というNPO法人運営しているプレーパークが4か所、その法人以外のプレーパークが1か所と準備中のプレーパーク冒険遊び場が1か所あり、その子どもたちが自分たちの企画を実現していくということを盛んにやっているほか、3か所の青少年交流センターがあり、それぞれの場所で運営委員会と子ども運営委員会があり、1年を通して何かしらの企画をやっている。  
また、世田谷区では、引きこもりや就労支援を必要とする若者たちの支援にも果敢に取り組んでおり、マイナスの状況からプラスに持っていくサポートを子どもが拠点として使える場所と連携して取り組んでいる状況である。  
プレーパークなど子供が使える場所には、プレーリーダーやユースワーカー、さらに地域の住民や民生委員、青少年委員など、幾重にも伴走してくれる大人がおり、その存在があってこそその運営形態となっている。
- （委員） 子どもの居場所は学校やフリースクールなどがあると思うが、子どもには得意なものや不得意なものがあるため、子どものいいところを伸ばしていけるような場の選択肢が幾つもあることが良いと感じた。
- （委員） 前回の検討会で、両角委員から理想的な若者の参加形態を紹介いただき、今回の事例報告でそのためのノウハウを紹介いただけた。子どもたちが企画などで講師になることは、沢木委員の事例報告にも通じる部分でもある。  
荒川区で『参画のはしご』を考えると6段目の大人がしかけ、子どもと一緒に決定するという段階であり、今後、最終地点の8段目を目指していけるようにしたいが、時間が大変かかると思うので、粘り強く進めていけたらと思う。  
子どもの参画のためには、大人の参画も大事ということだが、大人がいろいろな形で参画や伴走することで、地域ぐるみで盛り上げていける社会ができると考える。これから何か取組を始めていければ思う。
- （委員） 商工会議所の役員は8割方が荒川生まれ、荒川育ちであり、荒川愛のこもった経営者がそろっているので、文化交流施設をより良いものにできるよう一生懸命努めていきたい。
- （委員） 区でも早速取り組まねばという発言もあったので、何か町会で協力できることがあれば、あらゆる人材を集め、このプロジェクトに携わっていきたい。
- （委員長） 文化交流施設は、竣工するまで比較的時間がある。きちんと子どもたちにも参加をしてもらい、商工会議所や町会の協力を得ながら、大人と子どもと一緒に参加できるだろう。
- （委員） 子どもがまちづくりに参加する過程自体が、あらゆる人が参加する過程になり得ることと考えるので、それを学ぶことは非常に大切である。日本の子どもは塾や部活で忙しいと思うが、どのように進めたのか。
- （委員） 子どもたちは自分がやりたいと思うことや面白いことに対して、忙しいが時間を惜しまないし、短い時間でも、隙間を作り全力投球する。大人も同じと思うが、いかに自分が本気になる場を作れるかということである。
- （委員） そのような場づくりをするために、どのような役割が重要だったか。
- （委員） 子どもたちが、実現したいと思っていることをできるという確信として捉えること

ができるかが重要である。そのために大人たちは、条件を整えたりするなど大人としてできることを考えることが必要である。

- （委員長） 本日の検討会は、7階へのアクセス動線や特色のあるトイレ、行きたくなるような上層階の外観の見え目が重要である、という大変有意義な議論ができた。

4象限マトリックスについても、今後、文化交流施設の機能について議論をしていきたい。

また、事例報告いただいた手法を参考に荒川という地域特色などを生かしつつ、子どもの参加を加えながら、検討を進めていきたい。

### 3 次回日程

11月26日（金）

### 4 事務局からの連絡事項